

編集委員が選んだ本

『14歳からの靖国問題』

小菅信子 / ちくまプリマー新書 / 2010年7月 / 798円
 高校生に是非一読を勧めたい一冊である。数年前、小泉元首相の靖国参拝を契機に、靖国問題に関わって様々な本が出版されたが、どれも高校生にとっては敷居の高いものばかりであった。この本は、母でもある筆者が、自分の14歳の娘が理解できるようにと書いた本である。読みにくいわけがない。

では簡単な概説書かというそうではい。靖国問題を、戦争で負った「傷」の癒しの問題と捉え、癒されない戦争の傷は、反戦平和を希求する力にもなれば、復讐や暴力の連鎖を生み出す力にもなると、靖国問題の根本を捉えている。

このことを考えるうえで示唆的なエピソードをひとつ。アメリカのアーリントン国立墓地には、当初南北戦争で戦死した北軍の兵士しか埋葬されなかったが、その後の「南北和解」で、南軍兵士もそこで追悼されるようになった。では同じ時期におきた戊辰戦争の犠牲者はどうか……戦争での死者を選別して追悼する「場」に癒しは訪れない。

『武力による政治の誕生』

本郷和人 / 講談社選書メチエ / 2010年5月 / 1575円

日本中世史を学ぶ者にとって刺激的な本である。中世の始まりが院政期からというのが「常識」となっており、教科書記述もその多くがそれに倣っている。その考え方のベースとなっているのが「権門体制論」であるが、著者はそれに真っ向から異議を唱える。

自立する王権として将軍を捉え、武家は天皇の下位に位置するのではなく、逆に幕府がより上位の権力として政治・外交・祭祀を司っていたと指摘する。その意味で、清盛の福原幕府こそが武家政権のバイオニアであり、それに続く鎌倉開府こそが中世の始まりであるという。

教科書記述が変わった時に、現場教師からは教えにくくなったという声が多数聞かれた。今でもそう思っているのなら、是非一読を！

『一人の声が世界を変えた！』

伊藤千尋 / 新日本出版社 / 2010年1月 / 1575円

9.11のテロが起きた時、筆者は朝日新聞のロサンゼルス支局長だった。生々しい描写から始まった記述は、「戦争する権限を大統領に委ねる」決議に下院でただ一人反対した、黒人女性議員への取材に移る。その感動的な経過。続いて、イラク戦争で出征した息子の死に、当時のブッシュ大統領がいる牧場に出かけた女性の行動。

次々に、行動して社会を動かした人々のエピソードが続く。筆者は、ほかにサンパウロやバルセロナの支局長も勤め、35年を越す記者生活で68カ国取材した。

徹底した現場取材（東欧革命下のルーマニアでは市街

戦も体験！）で集めた人々の声に圧倒され、勇気がわき、いまを生きるわが身に自問せざるを得なくなる。

『坂の上の雲』と司馬史観

中村政則 / 岩波書店 / 2009年11月 / 1890円

現実の歴史は、始めた個人の思惑を超えて進む。いま公共の電波で『坂の上の雲』が3年かけて放映され始めているが、強大な影響力を持たないとも限らない。

とすれば、そこに決定的に抜け落ちていものや、最近の歴史学の成果で明確に誤りと判明した箇所について“暖かく”まとめた、時宜を得た好著と思われる。

これを読むと、生前司馬遼太郎氏が、同じ公共の電波を通じて、「なるべく映画とかテレビとか、そういう視覚的なものに翻訳されたくない作品」と、『坂の上の雲』について語っていた（1986年放送とのこと）ことの深い意味も、とらえられるような気がする。

『子どもとともに歴史を学び、歴史をつくる 黒羽清隆歴史教育論集』

加藤正彦・八耳文之編 / 竹林館 / 2010年4月 / 3360円

1987年6月19日、「歴史を語る名人」「詩魂を歴史叙述に持ちこんだ粹人」の異名を持つ黒羽清隆氏が53歳で他界された。氏は、民衆や子どもの視点から時代を具体的にイメージすることに腐心した。「私の日本史をつづじて、無告の民の氷のようにかがやく魂を（略）世の若く新しいあなた方につたえようと、あがいていた」（「ある深夜の感想」1978年6月）という情熱であった。氏の仕事は、『パネル日本史』、『歴史のとびら』、『文化史でまなぶ日本の歴史』、『人物史でまなぶ〜』などで結実した。

本書は、氏の直接間接の教え子たちが編んだ。黒羽氏の講演記録や原稿を収録した本編は今さらながら感じ入って読んでしまう。たとえば、「日中十五年戦争をどうとらえるか」で、氏は「日中戦争があくまで幹（軸）であって、日米戦争はその幹から出た枝である」という基本的な認識が必要で、そのためには、天皇の日中戦争に対する見方、清沢汎の見方、参謀総長杉山元の見方、中国共産党の解放区の実態などを、子どもたちに十分理解させることが不可欠であるという。

このほか、プロローグ「いまなぜ黒羽清隆か」で加藤氏と鹿野政直氏（早稲田大学名誉教授）の文章が、エピソード「人間黒羽清隆」で図師尚幸氏（書籍編集者）と八耳氏の文章が載せられている。「黒羽氏の仕事」の意義やそれを生んだ「黒羽氏の人柄」が偲ばれて興味深い。「子どもとともに歴史を学び、歴史をつくる」ことは年々難しくなっているが、元気を失いそうになった時、この本は社会科教師の原点に帰って夢や希望を語る活力を与えてくれるだろう。